



Do you like

some more

ENGLISH?



日本の英語学習事始め 2 ～明治時代～

前回の英語通信では、日本での英語学習事始め、特に“通訳”というプロフェッショナルの様子をご紹介しましたが、今回は明治期の英語教育についてお話ししたいと思います。

江戸幕府が崩壊し、日本は新しい国づくりを始めます。「国づくりは人づくりから」とも言われる通り、明治政府は、国民全員が教育を受ける機会を得る「国民皆学」を目指して教育制度を整えていきます。そして、文明開化で西洋文化が流入する中で、英語教育には特に力がそそがれていきます。

2020年度から小学校で英語が教科になることは知っていますよね？



はい、小学校3、4年生で外国語活動がはじまり、5、6年生からは正式教科になるのですよね。

実は、明治期に一時的ではありますが、小学校で英語が教科目に入っていた時期がありました。



へ～っ！今からほぼ150年前だよ。その英語教育が続いていけば、今頃は日本人全員が英語ペラペラ？

明治5年(1872年)に学制が公布されますが、しばらくは制度やカリキュラムの試行錯誤が続きます。この間に一時期、小学校でも教科となっていたものの、基本的には英語は中学から始める教科です。明治時代の英語教育を大雑把にいうと、「**正則英語**」と「**変則英語**」があり、それぞれで指導内容が異なります。



正則、変則とはどういうことですか？

正則英語とは、外国人教師が教え、発音、会話、読解力を総合的に習得する英語学習方法です。これに対して**変則英語**は、日本人の教官から文法を学び、英語の書物を読み解く訓読(翻訳)中心の学習方法を言います。中学校で英語を学ぶ学生全員が外交官や国際的な職業につくわけではありません。変則英語を教える学校が多かったのは、この時代、とにかく英語を介して西洋事情に通じ、西洋の学問、知識を吸収するのが目的で、発音など関係なしに英語が読めればよかったからです。

ところで、一万円札に描かれた人物は誰かわかりますか？



えーっと聖徳太子…じゃなかったっけ？



何言っているの、それは旧札でしょ。一万円札は福沢諭吉です。

では Yeah 君、旧札の五千円と千円に描かれた人物は？



五千円札が新渡戸稲造で、千円が夏目漱石！



そうです！福沢諭吉、新渡戸稲造、夏目漱石、この三人は、日本の英語教育に深く関わった人物たちです。まずは、福沢諭吉ですが、彼は、幕末に蘭学から英語に転向した人です。そのきっかけになったのは、1859年に開港した横浜港を見学に行き、これまで必死で勉強してきた蘭学が役に立たないことに衝撃を受けたことです。翌年1860年に遣米使節団の護衛船、咸臨丸に乗って渡米。諭吉25歳のときです。約1ヵ月の滞在で、諭吉は英語辞書などを買集め、帰国から3ヵ月後に「増訂華英通話」(広東語・英語対

訳の単語集をカタカナ・漢字・日本語訳語を付記し編集したもの)を出版しました。そして、1863年に創設した英学塾を明治元年である1868年に慶應義塾とし改称し、教育活動に専念します。



諭吉さん、エネルギーがすごいですね！

新渡戸稲造は、明治元年の時点で6歳です。彼は、盛岡の裕福な武家に生まれました。彼が6歳から8歳ぐらいの間に、かかりつけの医師から英語の手ほどきを受けていたようです。



おほっちゃま～！

13歳で、東京英語学校に入学します。この学校で教授されるのが「**正則英語**」です。

稲造は、その後、クラーク博士で有名な札幌農学校に入学しますが、東京英学校も札幌農学校もすべての授業が英語で行われます。これらの学校で、まさに時代を代表する“英語の達人”が育てられたと言えるでしょう。諭吉がほぼ独学で膨大な書物を読んで英語を習得したのに比べると、稲造の学生生活は生の英語漬けの生活といえますね。



Boys be ambitious!



夏目漱石は、1867年生まれなので、稲造の5歳年下になりますね。

今も、ゆとり教育世代かそうでないかが話題になるとと思いますが、明治期のこの5年が英語教育の上では大きな差になります。1877年の西南戦争の財政逼迫から、政府は高給取りの外国人教師の数を大幅に減らします。そして、明治10年代半ばにはこれまでの急進的な欧米化主義に反発するように、国語主義が叫ばれるようになり、発音無視、訳語中心の**変則英語**が主流となっていきます。



じゃあ、漱石は変則英語を学んだということですか？

そうですが、実は、漱石は英語の授業が行われない中学に入学したため16歳で大学予備門である英学塾成立学舎に入学するまで、英語を勉強する機会がなく、成立学舎に入ってから出足が遅かった分、成績はふるわなかった、と言われます。「お札の人」のついでに言うと、現在の千円札に描かれる野口英世は、漱石の9歳年下で、更に恵まれない学習環境でありながら漱石が16歳のころやっと読んだ内容の英語教科書を12歳の時に独学で読んでいたと伝えています。



漱石さん、がんばれ～！

はい、頑張りました！彼は夢中で勉強し、手当たり次第に英書を読みあさりしました。大学予備門を卒業するころには、英語は当然のこと、ほとんどの教科で首席だったそうです。その後、漱石は英語教師を歴任した後、英語教育法研究のためにイギリスへ留学します。

英会話、ちょっと苦手かも・・・



すご～い！ 私たちも頑張れば努力が報われるような気がします！

ここで、先ほどの正則と変則の話に戻りますが、新渡戸稲造は**正則英語**を学びました。福沢諭吉はほとんど独学と言っているため、**変則英語**（訓読中心）と考えていいでしょう。夏目漱石もまた**変則英語**です。ということで、二人の発音に関するこんなエピソードが残っています。

諭吉の弟子である高橋誠一郎（経済学者）が、朝の散歩のときに、日曜日になると諭吉に「今日はスンデーか？」と聞かれた、というエピソードを語っています。

また、漱石は、ロンドン滞在中、「英語が通じなくて苦労する」と自ら語っていることから、英会話はあまり得意でなかったのだろう、という話は有名です。



有名人は大変だね。発音が下手だとか、英会話ができないなんていう話がずっと伝わってしまっ！

明治期に英語を学んだ人たちが読んだ英語の教科書の話もしようと思ったのですが、紙面が足りなくなってしまいました。今回はこの時代の教科書の中身を少しのぞいてみたいと考えています。



To be continued...

